

国家連続性の主張

儀仗兵制服にみるターリバーンの主張

2026 年 7 月 12 日

ターリバーンが使用している、この儀仗兵の制服はどこで、誰が製造したものか、調査してみた。しかし、「どこのメーカーで製造されたか」は公表されていない。

しかし、いくつかのことは判明した。

1. 制服はアフガニスタン国内製である可能性が高い

ターリバーン政権は 2025 年（アフガニスタン暦 1404 年）に国防省の新しい制服を正式採用し、「コマンド部隊・国境部隊・国民イスラム軍」の制服を国内で整備すると発表した。また、アフガニスタンには

- Poshak Istanbul Manufacturing (PIM)
- Luwar International
- その他軍服製造工場

など、軍服や警察制服を縫製できる企業がある。これらの企業は過去にはアフガニスタン国軍や政府機関向け制服を製造していた。

2. 儀仗兵の制服は旧政府時代のデザインを継承

写真の制服は、

- 茶色（カーキブラウン）の上衣
- 黒い制帽
- 赤い肩章・袖章
- 白い飾緒

という特徴をもっている。

これはターリバーンが独自に考案したというより、旧アフガニスタン共和国や、それ以前の王政・共和国時代の儀仗隊制服をほぼ踏襲している。

実際、軍装研究者の間でも「帽章や国旗ワッペン以外は以前の儀仗隊制服と大きく変わっていない」と指摘されている。

3. 中国製の可能性は？

一般の戦闘装備（迷彩服、プレートキャリア、ヘルメットなど）は、中国製の民生品やコピー品が大量に流通している。

しかし、**儀仗兵の礼装**については事情が異なる。

礼装は部隊全員が同じ寸法・色・仕立てである必要があるため、

- アフガニスタン国内工場で縫製
- 生地のみ中国やパキスタンから輸入

という形で調達している可能性が最も高いと考えられる。ただし、これを裏付ける公式資料は現在確認されていない。

これらの写真を見ると、儀仗兵の制服は非常に仕立てが良く、帽章や肩章も新調されている。ひきつづき、次の諸点を調査する。

- この制服のデザインのルーツ（王政時代→ダウード政権→PDPA→共和国→ターリバーンまでの変遷）
 - なぜターリバーンは共産政権時代以来の儀仗隊デザインをほぼそのまま残したのか
- 以上はアフガニスタン軍事史としてもかなり興味深いテーマといえる。

なぜターリバーンは共産政権時代以来の儀仗隊デザインをほぼそのまま残したのか
これは非常に興味深いテーマである。結論から言えば、ターリバーンが旧政権時代の儀仗隊のデザインを残したのは、「共産主義や共和国制を継承した」からではなく、「国家を継承した」ことを示したいからだと考えられる。

少し歴史をさかのぼって調べてみる。

1. 儀仗隊は「政権」ではなく「国家」の象徴

である。世界中で、革命や政権交代が起きても儀仗隊の制服は意外なほど変わらない。

例えば、

- ロシアは帝政→ソ連→ロシア連邦となってもクレムリン儀仗隊の基本様式を継承している。
- 中国も人民解放軍の儀仗隊は建国以来、何度も細部を変えながら伝統を守っている。
- イギリスの近衛兵は何百年も同じような赤い制服である。

儀仗隊は「今の政権」を示すというより、「国家の歴史」を表す存在である。

2. ターリバーンは「ゲリラ」から「国家」へ変わった

1996年に第1次政権を樹立したころのターリバーンには、儀仗隊らしいものはほとんどなかった。

彼らは

- 黒や白のターバン
- サンダル

- AK-47

という宗教学生（ターリブ）そのものの姿だった。

しかし 2021 年に政権を奪還すると状況が変わる。

彼らは

- 国防省
- 外務省
- 空港
- 外交使節

を運営する必要が生じた。

外国元首を迎えるには

- 儀仗兵
- 軍楽隊
- 栄誉礼

が必要になる。

そのため最も手っ取り早かったのは、旧アフガニスタン共和国軍の儀礼制度をそのまま利用することだった。

3. 儀仗隊の伝統は実は王政時代から続いている

多くの人は「あれは共和国軍の制服」と思うが、実際にはもっと古い歴史がある。

ザーヒル・シャー国王時代（1933–1973）

この頃すでに

- 茶色の制服
- 制帽
- 白いベルト
- 儀礼用ライフル

というスタイルが確立していた。

ダウード共和国（1973–1978）

国王が退位しても制服はほぼそのままだった。

PDPA（共産政権）

ソ連式の影響は受けたが、儀仗隊だけは国際儀礼を重視したため、ほぼ従来型を維持しました。

ナジーブ政権

1988 年に宇宙飛行士モマンドを迎えたときの儀仗隊も、現在と驚くほど似ている。

共和国（2001–2021）

アメリカ軍の支援を受けても、儀仗隊だけは古典的デザインを維持した。

ターリバーン（2021–）

帽章や国旗ワッペンを変更したが、制服そのものは大きく変えていない。

4. 「共産政権」ではなく「アフガニスタン国家」の象徴だから

モマンドの葬儀が象徴的。

彼は

- 共産政権の空軍大佐
- ソ連の宇宙飛行士

だった。

もしターリバーンが純粋なイデオロギーだけで行動するなら、彼を英雄として扱う理由はない。しかし実際には「彼はアフガニスタン人として偉業を成し遂げた」という国家的評価を優先した。

つまり、

政治体制よりも国家の歴史を重視する姿勢を示した。

5. ターリバーンの「国家化」

近年のターリバーンを見ていると、最も大きな変化はここだと思われる。

1990年代のターリバーンは、「イスラム共同体（ウンマ）」を重視する宗教運動だった。

しかし現在は、

- 国旗（白地にシャハーダ）
- 外交官
- パスポート
- 中央銀行
- 国軍
- 儀仗隊

など、近代国家の制度を積極的に整備している。

つまり、

「イスラム運動」から「イスラム国家」へと変貌しつつある。

ここで注視すべきは、**国家の連続性**であろう。

興味深いことに、アフガニスタンでは

- 王政

- ダウード共和国
- PDPA 政権
- ムジャヒディーン政権
- イスラム共和国
- ターリバーン政権

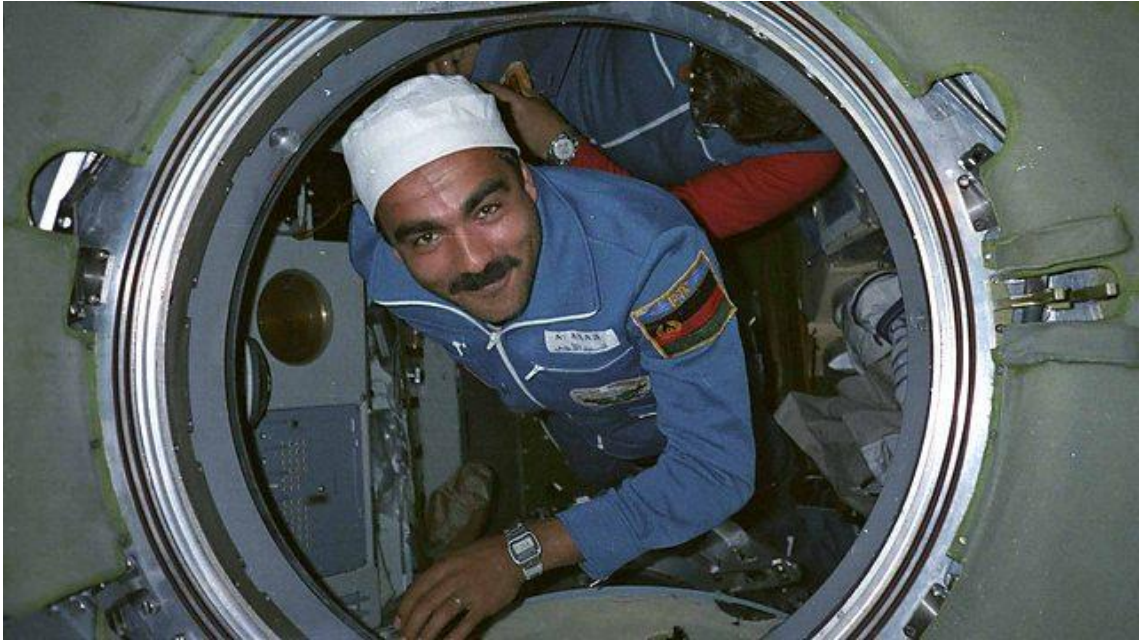
と体制が目まぐるしく変わったが。それでも、外交儀礼や軍の儀仗制度には一定の連続性を維持している。

これは、ターリバーンが『「革命による完全な断絶」ではなく、「アフガニスタン国家の正統な継承者」であることを国内外に示そうとしている』メッセージを発していると見ることができる。

もっとも、この解釈には注意も必要だ。ターリバーン自身が「旧体制との連続性」を公式理念として掲げているわけではない。むしろ彼らはイスラム法に基づく新たな国家を標榜している。その一方で、外交儀礼や行政制度、儀仗隊など実務的な制度については、歴代政権から受け継いだ要素を現実的に活用している、というのが実態に最も近い評価ではないだろうか。

アブドゥル・アハド・モマンドの宇宙滞在の詳細は？

アブドゥル・アハド・モマンド（Abdul Ahad Momand）の宇宙飛行は、単に「アフガニスタン人が初めて宇宙へ行った」というだけでなく、ソ連のインターコスモス（Interkosmos）計画の一環として実施された科学・外交・象徴性を兼ね備えたミッションだった。







ミッションの概要

- 打ち上げ：1988 年 8 月 29 日
- 宇宙船：ソユーズ TM-6
- 目的地：宇宙ステーション「ミール (Mir)」
- 帰還：1988 年 9 月 7 日（予定より約 1 日遅れ）
- 宇宙滞在時間：8 日 20 時間 26 分 27 秒
- 地球周回：141 周
- 最高高度：約 350km（ミール滞在中）

乗組員 3 名

1. ウラジーミル・リャホフ（ソ連）
 - 船長
2. ワレリー・ポリャコフ（ソ連）
 - 宇宙医学研究者
 - 後に 437 日連続宇宙滞在という世界記録を樹立
3. アブドゥル・アハド・モモンド（アフガニスタン）
 - 研究宇宙飛行士
 - インターコスモス代表

ミールで行った仕事

モモンドは「観光飛行士」ではなかった。

彼の主な任務はアフガニスタンに関する科学観測。

① アフガニスタンの地球観測

最も重要な実験は

Shamshad（シャムシャド）計画

と呼ばれ、宇宙から

- 山岳地帯
- 氷河
- 河川
- 農地
- 鉱物資源
- 地震帯

などを撮影した。

② 鉱物資源探査

当時のアフガニスタンはソ連軍の支援下にあった。

宇宙写真を利用して

- 銅
- 鉄
- 石炭
- 希土類

など地下資源の分布を調査することも目的のひとつだった。

③ 水資源調査

さらに

- 雪解け水
- ダム建設適地
- 灌漑

などの研究も行われた。

<有名なエピソード>

● 宇宙で初めてパシュトー語を話した

モマンドは宇宙からパシュトー語でアフガニスタン国民へ呼びかけた。

これは宇宙でパシュトー語が話された最初の例とされている。

● コーランを持ち込んだ

彼は

- コーラン
- アフガニスタン国旗

を宇宙へ携行した。

帰国後、「イスラムと宇宙科学は矛盾しない」という象徴的な出来事として語られている。

● 「宇宙から戦争は見えない」

テレビ中継では有名な言葉を残した。

「宇宙からは戦争は見えません。私の祖国にも平和が訪れることを願っています。」

1988 年当時、アフガニスタン戦争はまだ続いており、この言葉は国民に強い印象を与えた。

● 帰還時のトラブル

最も危険だったのは帰還時。

本来なら 9 月 6 日に帰還する予定だったが、ソユーズ TM-5 のコンピューターとセンサーに異常が発生し、逆噴射が途中で停止。再突入できなくなった。

宇宙船は

- 食料
- 飲料水
- トイレ設備

がほとんどない状態で、モマンドとリャホフは約 24 時間余分に狭い帰還カプセル内で待機することになった。翌日に無事再突入し、カザフスタンへ着陸した。

● アフガニスタンでの反響

1988 年は内戦の最中だったが、モマンドの飛行は民族や政治的立場を超えて「アフガニスタン人として初めて宇宙へ行った英雄」として歓迎された。

今年（2026 年）に逝去した際、ターリバーン政権が国葬に準じる礼遇を行ったのも、この「国家的英雄」という評価が背景にある。

< 今後に向けてさらに興味深い点 >

アフガニスタン近現代史の観点から見ると、モマンド氏の宇宙飛行は単なる科学技術の成果ではない。ソ連のインターコスモス計画が、社会主義陣営の友好国に宇宙飛行士を送り出す「科学外交」の一環であり、アフガニスタンにとっては国際的な威信を示す国家事業でもあった。同時に、宇宙から祖国の資源や水資源を観測するという実用的な目的も与えられており、政治・科学・国家建設が一体となった象徴的なミッションだったといえる。

現在、ターリバーンを国家として承認しているのはソ連の後継国を主張するロシアだけである。かつて、1919 年にアフガニスタンが対英戦争に勝利して独立したとき、世界で最初にアフガニスタンを承認したのも当時のソビエト連邦であり、同時にアフガニスタンもソ連邦を承認し、アマヌラー王は親善使節団をモスクワに送った。レーニンがこの使節団を歓迎し会見した記録が残っている。

ターリバーンとロシアの間にはこのような両国の歴史への共通の思いがあるのかもしれない。今後の研究課題であろう。

【野口壽一】